

親からの暴力が非行に影響

— 中学生に調査、京都大などが分析 —

概要

SMBC 京大スタジオ「貧困・格差・虐待の連鎖を乗り越える教育アプローチの研究開発と普及」プロジェクトでは、基礎研究の一環として「国際自己申告非行調査(ISRD)第4次調査」の日本国内における調査を実施し、このたび、プロジェクトメンバーの京都大学大学院教育学研究科 岡邊健教授が、その結果を公表しました。

近畿地方の公立中学校の生徒 1,820 名から回答を得た本調査から、27.4%が親から叩かれるなどの暴力を、14.2%が親から強く殴られるなどの深刻な暴力を経験している実態が明らかになりました。分析の結果、親からの暴力を受けた経験がある生徒はない生徒に比べて、過去1年間に非行に関わった経験が、統計的に有意に多いことがわかりました。また、経済的に余裕がない家庭のほうが親からの暴力が発生しやすく、さらに「家庭に経済的余裕がなく、かつ親からの暴力があった」環境で、最も非行が多くなる傾向が確認されました。

プロジェクトでは今後、SNSの利用実態などについても分析を進める方針です。

本研究成果は、2026年3月15日に青少年問題学会第4回大会(オンライン)で発表されました。

中学生に調査

親からの暴力が非行に影響

世界約40か国が参加する「国際自己申告非行調査 (ISRD)」プロジェクトの日本国内における調査の結果



<h4>データ 調査の概要</h4>  <ul style="list-style-type: none">● 対象: 近畿地方の中学生 1,820名● 時期: 2024年12月～2025年1月● 方法: iPadを用いた集合式の調査票調査● 実態が明るみに出にくい非行や犯罪等の被害の把握を目的とした世界最大の学術調査プロジェクト	<h4>実態 「親からの暴力」の広がり</h4>  <ul style="list-style-type: none">● 27.4% が「たたかれたり、平手打ちされたり、突き飛ばされたりした」経験あり● 14.2% が「ものでたたかれたり、強くなぐられたり、けられたり、ひどく痛めつけられたりした」経験あり● 「しつけ」名目の暴力が、これまでの想定以上に広範囲に及んでいる実態を示唆
<h4>結果 親からの暴力と非行の関連性</h4>  <ul style="list-style-type: none">● 暴力を受けた経験がある生徒は、ない生徒よりも非行に関わる割合が多い● 経済的に余裕のない家庭では、親からの暴力を受けたことのある生徒が多い● 経済的困窮 × 親による暴力が重なる環境において、非行が最も多くなる傾向	<h4>提言 非行は「社会の問題」</h4>  <ul style="list-style-type: none">● 非行を中学生個人の問題ではなく「社会の問題」として捉えることが必要● 困難を抱える家庭への支えの充実が青少年の非行の抑制につながる● 今後は、生徒をとりまく地域の環境やSNSの利用実態などについて分析していく予定

研究の概要

1. 背景

●国際自己申告非行調査(ISRD)は、1990年代に開始された国際的な学術調査プロジェクトであり、第4次調査(ISRD4)には世界のおよそ40か国が参加しています。日本のほか、アメリカ、イギリス、イタリア、オランダ、スウェーデン、スペイン、メキシコ、ブラジルなどが参加しています。[\(https://isrdstudy.org/\)](https://isrdstudy.org/)

●青少年を対象とする国際比較調査としては、OECD生徒の学習到達度調査(PISA)や国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)が知られていますが、これらの調査の主目的が学力の測定にある一方で、ISRDは、こどもの生活状況全般に焦点を当てています。統一された質問項目により構成された調査票(各国の言語に翻訳)により、こどもの社会生活(学校生活を含む)、非行、犯罪・虐待の被害の実態を明らかにし、こどもの行動の背景・要因を特定することができるのが、大きな特徴です。

●少年非行は、万引きや落書き、薬物使用など、実態が明るみに出にくい、あるいは被害者がいない犯罪が大部分を占めています。また、実際に犯罪・虐待の被害経験があっても、彼らはそれを警察に通報・報告しない傾向にあります。このような理由で、非行や被害の実態は警察統計などに反映されにくいいため、非行行動や被害状況の実態を把握するために開発された手法が、自らの過去の経験を自身で報告してもらう「自己申告法」という手法です。ISRDは自己申告法を用いた世界最大規模の青少年対象の調査です。

●ISRD4の調査項目と単純集計結果は、既刊の『第4次国際自己申告非行調査(ISRD4)研究報告書』で公表しています。その電子版は、京都大学学術情報リポジトリにおいて公開しています。

[\(http://hdl.handle.net/2433/297663\)](http://hdl.handle.net/2433/297663)

●以下、本リリースでは、先月15日に行われた青少年問題学会第4回大会(オンライン)で、調査メンバーの岡邊健が発表した内容の概要をお伝えします。

2. 研究手法・成果

●調査をおこなったのは、2024年12月から2025年1月にかけてです。

●対象は、近畿地方のいずれも人口50万人以上の2つの市における、5つの中学校に在籍する中学校1～3年生であり、有効回答数は1,820(男性927、女性869、性別その他・無回答24)でした。

●タブレット端末(iPad)を用いて、集合自記式で行われました。

●調査は、京都大学大学院教育学研究科社会調査を伴う研究倫理審査委員会の承認(承認番号:24-005)を得たうえで、生徒本人とその保護者の同意に基づいて実施されました。

●明らかになったことは、次のとおりです。

[親から暴力を受けた経験]

・「これまでに、親から、たたかれたり、平手打ちされたり、突き飛ばされたりしたことがあるか」との質問に、27.4%の生徒が「あった」と回答¹。

・「これまでに、親から、ものでたたかれたり、強くなぐられたり、けられたり、ひどく痛めつけられたりしたことがあるか」との質問に、14.2%の生徒が「あった」と回答²。

・質問文に「罰として行われた場合を含む」と明記されていたのが、本調査の特徴。親からの暴力を受けたことのある層が、かなりの広範囲に及んでいることを示唆している。

¹ 質問文は、「これまでにあなたは、母親や父親(または義理の母親や義理の父親)から、たたかれたり、平手打ちされたり、突き飛ばされたりしたことがありますか(あなたへの罰として行われた場合も含まれます。))」。この質問に回答した1,775名中486名。なお、男性と女性で統計的有意差はなかった。

² 質問文は、「これまでにあなたは、母親や父親(または義理の母親や義理の父親)から、ものでたたかれたり、強くなぐられたり、けられたり、ひどく痛めつけられたりしたことがありますか(あなたへの罰として行われた場合も含まれます。))」。この質問に回答した1,774名中252名。なお、男女間に統計的有意差はなかった。

[過去 1 年間の非行の状況]

- ・過去 1 年間に、何らかの非行に関わった生徒は、全体の 4.8%³。
- ・質問した 14 種類の非行のうち、過去 1 年間に 2 種類以上の非行に関わった生徒は、全体の 1.4%⁴。

[親から暴力を受けた経験と非行の状況との関係]

- ・非行経験(過去 1 年間に関わった非行の種類数)を、過去に親から暴力を受けたことのある生徒⁵と、受けたことのない生徒で比べると、暴力を受けたことのある生徒のほうが、受けたことのない生徒よりも、非行に関わった経験を多く持っており、両者間に統計的に意味のある違いがみられた(図 1)。

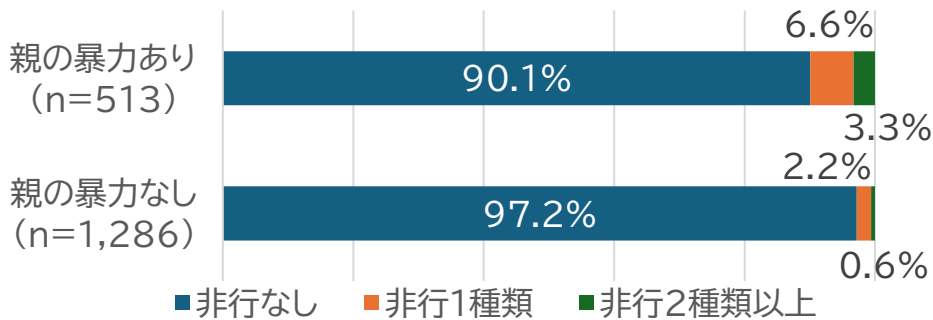


図 1 親からの暴力の有無と過去 1 年の非行(種類数)

[家庭の経済的状況と親から暴力を受けた経験の有無との関係]

- ・親からの暴力を受けたことがあるかどうかを、家庭に経済的な余裕がない場合とある場合で比べると⁶、家庭に経済的な余裕がない場合のほうが、親からの暴力を受けたことのある生徒が多く、両者間に統計的に意味のある違いがみられた(図 2)。

³ 最近 12 ヶ月間で「かべ、電車、地下鉄やバスに許可なく落書きをした」「バス停、建物の窓、自動車、バスや電車の座席などをわざと傷つけた」「店からものを盗んだ」「ものを盗むために、家や建物に侵入した」「バイクまたは自動車を盗んだ」「だれかからお金やものをとるために、凶器や暴力を使ったり、暴力を使うとおどしたりした」「身を守るために、または他人を攻撃するために、棒、バット、ナイフや銃といった凶器を持ち歩いた」「路上や、ショッピングモールやスタジアムなどの公的な場所で、集団でのけんかに参加した」「相手にけがをさせるほど、棒、バット、ナイフや銃を使って、ひどく痛めつけたり、傷つけたりした」「薬物を売ったり、売る人に協力をしたりした」「他人に見られたくないだれかの個人的な写真や動画を、インターネットでシェアした」「人種、民族的背景、国籍、宗教、性自認、性的指向などを理由に、SNS で心ないメッセージやコメントを送った」「お金をかせぐために、インターネット、メールや SNS を使って、他人をだましたこと(フィッシング、価値のないものや違法なものを売るなど)はありますか?」「データを入手したり、アカウントを乗っ取ったり、データを破壊したりするために、個人のアカウントやコンピュータへのハッキングまたは侵入をした」のうち、いずれか 1 つ以上を行ったものをカウント。1,820 名中 87 名。なお、該当者は男性のほうが多かった(男性:6.9%、女性:2.5%)。

⁴ 1,820 名中 25 名。なお、該当者は男性のほうが多かった(男性:2.2%、女性:0.5%)。

⁵ 前掲の「たたかれたり、平手打ちされたり、突き飛ばされたりしたことがありますか」「もてたたかれたり、強くなぐられたり、けられたり、ひどく痛めつけられたりしたことがありますか」の 2 つの質問のいずれか 1 つ以上に「あった」と答えた生徒。2 問とも無回答のケースは分析から除外した(以下同様)。

⁶ 「他の家庭と比べて、あなたの家庭は経済的に余裕がありますか」という質問に、「とても余裕がない」「余裕がない」「やや余裕がない」のいずれかと答えた生徒を「経済的な余裕がない」とみなした。この質問への回答の分布(無回答を含む)は、「とても余裕がない」0.5%「余裕がない」2.7%「やや余裕がない」11.0%「同じくらい」45.6%「やや余裕がある」15.1%「余裕がある」16.6%「とても余裕がある」6.3%、無回答 2.2%。

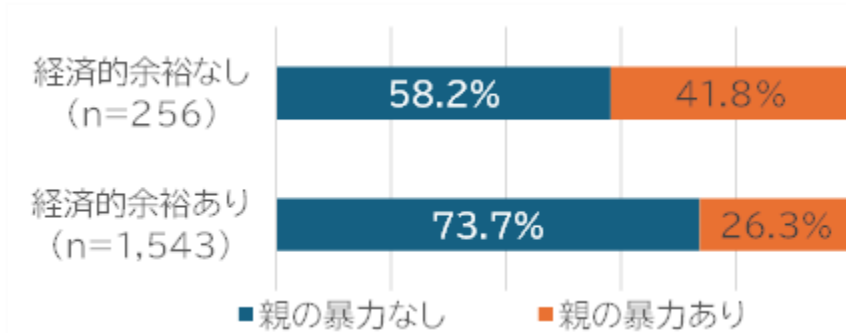


図 2 家庭の経済的余裕の有無と親からの暴力の有無

[家庭の経済的状況の別にみた、親からの暴力を受けた経験と非行の状況との関係]

- ・「家庭に経済的な余裕がない」場合と「家庭に経済的な余裕がある」場合に分けて、親から暴力を受けた経験と非行経験(過去1年間に関わった非行の種類数)との関係をみたところ(図3・4)、家庭の経済状況にかかわらず、親からの暴力を受けたことのある生徒は、受けたことのない生徒よりも、非行に関わった経験を多く持っており、家庭の経済状況にかかわらず、両者間に統計的に意味のある違いがみられた。
- ・もっとも非行が多かったのは、「家庭に経済的な余裕がなく、親からの暴力あり」の場合であり、もっとも非行が少なかったのは「家庭に経済的な余裕があり、親からの暴力なし」の場合であった。

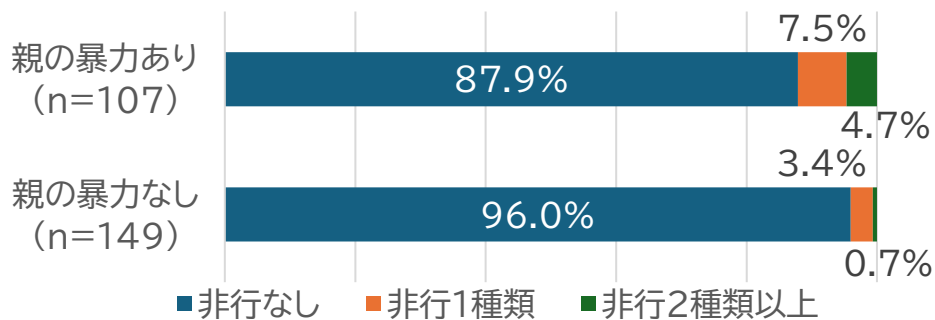


図 3 経済的余裕なしの場合 親からの暴力の有無と過去1年の非行(種類数)

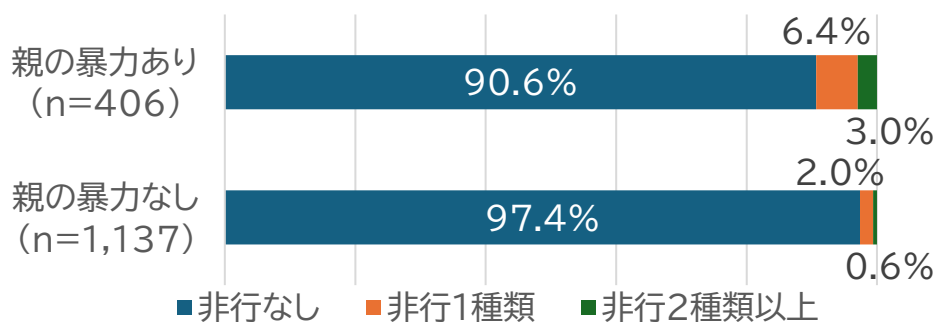


図 4 経済的余裕ありの場合 親からの暴力の有無と過去1年の非行(種類数)

- ・親から暴力を受けた経験のある生徒のほうが、ない生徒よりも、非行行動を行いやすくなること、とりわけ、家庭に経済的な余裕がない場合に、その傾向が顕著になることを、これらのデータは示唆している。

3. 今後の展望等

●本プロジェクトでは今後、こどもを取り巻く地域の環境、ソーシャルメディア(SNS)の利用実態などについても分析を進め、社会課題となっている「貧困・格差・虐待の負の連鎖」を断ち切る教育の重要性を裏付けるエビデンスの発信を継続する方針です。

●本調査では、対象者が無作為にサンプリングされているわけではないので、結果の一般化には慎重さが求められます。ただし、「家庭の蔵書数」を尋ねた質問への回答をみるかぎり、本調査の対象となった中学生の出身家庭の社会経済的地位の分布は、全国の状況と大差ないと考えられます⁷。

●ISR4 では本来、各国で大都市 2 市を任意に選定したのち、その市内においては対象者を無作為サンプリングすることになっています。無作為サンプリングによる調査の実施は、どの国においても難易度が高いものですが、日本においても同様であり、ISR4 については複数の市で教育委員会や校長会と交渉を重ねたにもかかわらず、最終的にこれを断念せざるを得ませんでした。数年以内に実施を予定している第 5 次調査(ISRD5)においては、代表性のあるサンプルでの調査の実施を目指したい考えです。

4. 研究プロジェクトについて

●本研究は、国立大学法人京都大学、株式会社三井住友フィナンシャルグループおよび株式会社日本総合研究所による社会的価値創造を目的とした産学連携の取組「SMBC 京大スタジオ」のプロジェクト「貧困・格差・虐待の連鎖を乗り越える教育アプローチの研究開発と普及」(通称:『生きる』教育プロジェクト)の一環で実施しました。

(<https://smbckustudio.iac.kyoto-u.ac.jp/project/project01/>)

●ISR4 に携わっている調査メンバーのリストは、京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM(教育研究開発フォーラム)のウェブサイトにて公開しています。(<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/ikiru/isrd/>)

●なお、ISR4 の実査にあたっては、JSPS 科研費(JP21H00785)および龍谷大学矯正・保護総合センターからも助成を受けました。

<研究者のコメント>

京都大学大学院教育学研究科教授、岡邊健のコメント

●「親からこどもへの暴力が、しつけを名目に行われることは多い。本調査では、暴力を受けているこどもが、これまでに考えられてきたよりもかなり広範囲に及んでいる可能性があることを示している。」

●「日本は、国際的にみれば少年非行が少ない国である。今回の調査でも、非行経験をもつ中学生はそれほど多いとはいえないことが確かめられた。ただし、親からの暴力があったかなかったかで、非行経験が明確に異なることがわかった。」

●「今回の知見は、家庭の厳しい環境が中学生個人の非行行動に関連している可能性があることを示している。非行への社会的なまなざしは厳しく、『非行を行ったこどもへは厳しく対処すべきだ』という声も根強くあるが、非行を個人の問題で片付けてしまことは不適切ではないか。非行を、こどもが成育する社会全体の問題として把握していくことが求められる。」

⁷ 田端健人の研究(「家庭の蔵書数は SES(社会経済的状況)の代替指標として適切か?—全国学力・学習状況調査、PISA、TIMSS の多面的分析による検証」『宮城教育大学教職大学院紀要』5 号所収、2024 年)によれば、家庭の蔵書数はその家庭の社会経済的状況を測定する指標として有用である。本調査では、全国の中学校 3 年生を対象とする全国学力・学習状況調査(学テ)に含まれる質問とほぼ同じ尋ね方、すなわち「あなたの家には、およそどのくらい本がありますか(ただし、一般の雑誌、新聞、教科書は数えません)」という質問文により、蔵書数の回答を得た。回答分布は、学テ(n=898,604)が「0~10 冊」17.9%、「11~25 冊」21.6%、「26~100 冊」31.6%、「101~200 冊」15.3%、「201 冊以上」13.7%であるのに対して、本調査(中学校 3 年生、n=592)は、それぞれ 18.0%、21.9%、34.1%、13.7%、12.4%であり、両者に大きなずれはなかった。

●「今回の調査からは、家庭に経済的な余裕がない場合のほうが、親からの暴力を受けたことのある生徒が多いこともわかった。親から子どもへの暴力の背景に、経済的な側面を含む厳しい家庭環境があることが伺える。その意味では、非行の背景に親による暴力があるのだとしても、単に親を非難すれば済むというわけではないといえる。困難を抱える家庭に対して、経済的側面を含む社会による支えを充実していくことが、結果的に青少年の非行の抑制にもつながると考えるべきだろう。」

<学会発表の詳細>

タイトル：「家庭環境と非行」再考

発表者：岡邊 健

学会大会名：青少年問題学会第4回大会(オンライン)